文化外交と社交の概念の相関・編成
―戦前期国際ペンクラブにおける矢代幸雄―

Yukio YASHIRO and International PEN Club in the Prewar Period

目野　由希
Yuki Meno

Abstract:

The purpose of this paper is:

(i) to consider the relationship between Yukio YASHIRO (1890-1975), who was one of the greatest Asian art historian and one of the most important player of Japanese cultural diplomacy, and International PEN club in the prewar period;

(ii) to discuss the International PEN club as Social Club in London from 1924 to 1941; and

(iii) in the process, to seek a means to get a complete view of the relationship between Japan PEN club in the prewar period and International PEN club, especially drawing attention on the circumstances during 1920s to 1930s when the elegance and diversity at the upper community in London gradually shifted to making policies on the international art cultures.

Keywords :Yukio YASHIRO, International PEN club, Social Club, Japan PEN club in the prewar period, London from 1924 to 1941

キーワード：矢代幸雄、国際ペンクラブ、ソーシャルクラブ、戦前期日本ペン倶楽部、1924年から1941年のロンドン

一　本稿の目的

本稿では、二つの事項について考察する。

ひとつは、東京美術学校教授・東京文化財研究所所長であり、戦前期から戦後期にかけ、例外的に大規模な対外文化政策に参加した矢代幸雄（一八九〇～一九七五）の、戦前期国際ペンクラブ・ロンドン本部との関係について。

もうひとつは、その戦前期国際ペンクラブの、特に一九二四年から一九三九年くらいまでの、イギリス式ソーシャルクラブとしての側面について。

二　矢代幸雄資料

矢代幸雄は東京美術学校教授、東京文化財研究所所長、そして戦後は大和文華館初代館長として活躍した美術史家である。彼は、戦前期の学者としては例外的に長い滞欧経験や国際的な人脈を生かし、日本美術の対外発信に貢献し、戦後の美術行政にも積極的に関与した。

一九二五年、サンドロ・ボッティチェッリについての英文の著作を発表し、これがヨーロッパの学者たちにも大きな影響を与える。当時、欧文での研究業績が欧米人に高く評価された日本人学者は少なく、彼は日本人西洋美術史家としてはパイオニアである。

また、東洋美術にも造詣が深く、彼の著書『水墨画』（岩波新書、一九六九）は、刊行後四十年以上経過した現在でも、水墨画についての基礎文献であり、信頼できる参考書としては類書を見ないほど卓越した水準を保っている。

彼の戦前からの国際経験は、彼が留学のために長期滞在した国の住民であるイギリス人・イタリア人との交流にとどまらない。

第二次世界大戦時、アメリカ軍が京都などの古都に対しては空襲をしなかった理由は、矢代と交流のあるアメリカ人の東洋美術研究者ラングドン・ウォーナーが、その文化的価値を尊重したからだ、という、巷間に流布しているいわゆる「ウォーナー伝説」は、矢代幸雄とウォーナーなどのアメリカ人との交際をうけ、矢代らの発言によって発生したものである。

これほどの活躍を見せた国際的学者である矢代の研究は、今世紀にいたるまで、停滞気味であった。

二〇〇三年くらいから、近年の文化政策研究の進捗の結果、また美術史研究の展開をうけ、ようやく美術史家のあいだに、彼を研究する機運が高まってきている状況である。

これまで、矢代幸雄の一次資料を直接調査して論文を書いた研究者というと、佐藤香里「GHQの美術行政――CIE美術記念物課による「美術の民主化」と矢代幸雄――」『近代画説』（明治美術学会、二〇〇三年十二月、十二号）など、佐藤香里くらいしかいない。海外での矢代幸雄資料調査は、これまで行われてこなかった。

ところで稿者は、「戦前期日本ペン倶楽部の研究―日印文化交流と国際文化政策」（科研費課題番号22320043、基盤研究（B））のため、二〇一〇年から二〇一一年にかけ、テキサス大学オースティン校ハリー・ランソンセンター（以後HRCと表記）の、国際ペンクラブ・ロンドン本部資料コレクションの調査を行った。

このコレクションのなかで、稿者ははからずも矢代幸雄資料を複数発見した。

また、矢代をめぐるロンドンの東洋美術史家たちのコネクション、ここに連なる中国ペンクラブ

資料を実見することとなった。

同資料はインデックスカードだけでも九〇〇〇枚を超える、膨大なコレクションである。このコレクションのうち、これまでに稿者が選択・採取した分だけに限定しても、二〇一〇年春の調査開始後、二〇一二年一月現在にいたっても、矢代幸雄に限らず、いまだ理解のスキームが確立できないほどの量の新事実の数々が確認されている。

本稿では、現時点で同資料群から確認できる、矢代幸雄をめぐる国際ペンクラブ・ロンドン本部の状況、および国際ペンクラブ・ロンドン本部の特徴について考察してゆく。

現在、HRCでは、創設期から一九七三年までの資料を中心とした、書簡や実務書類などの国際ペンクラブ資料を所蔵している*[1]。

同資料に含まれる記録文書のうち、矢代幸雄に関しては、国際ペンクラブ・ロンドン本部によって作成された、一九二七年の書簡の写し（タイプライターで作成された矢代幸雄宛書簡の、ロンドン本部側での記録用のカーボンコピー）およびその関係書簡数点、外務省・国際文化振興会・日本ペン倶楽部の三者が連携して作成した、皇紀二千六百年記念エッセイ募集の英文パンフレット一点が確認された（画像資料1）*[2]。

また、国際ペンクラブ・ロンドン本部の書記長が、東洋美術史研究者であるWalter Perceval Yettsとともに、矢代幸雄を他の中国人美術研究者とならべて評価したり、矢代に日本を代表して日本ペンクラブを設立してもらうように話し合う書簡など、関節的に矢代を話題とする資料も、何点も見つかっている。

前述の、皇紀二千六百年記念エッセイ募集の英文パンフレットでは、矢代幸雄は、国際的に募集されたこのエッセイ募集企画の選者として、他の選者と名前を並べている。

ただし、この選者では矢代は代表ではない。矢代の当時の国際的な名声をふまえると、彼の名前はこの種のパンフレットに選者として並んでいる方が自然であろう。

現存する資料を見る限り、彼は、国際ペンクラブロンドン本部と、戦前期日本ペン倶楽部との関係を取り結んでいる人物ではなく、一九二〇年代ロンドン本部が、矢代幸雄個人と、直接親交をもっていたことがわかる。

これまでの日本ペンクラブの公式な説明では、ペンクラブというのは、ロンドンの本部と各国ペンが組織の単位でかかわっていくものであり、個人が関係するのは、岡本かの子が戦前期に英国ペンクラブのテンポラリー会員になっていたように、一時的な接点にすぎなかったはずである。しかし矢代の場合は、残された資料を見る限り、個人的な親交と信頼関係が、長期にわたって継続し、日本ペンクラブとは別枠でロンドンとのコネクションを保ち続けているのである。

他国人による同時期のドキュメントと比較していっても、矢代の当時の扱いは、外交官クラスの別格であるとわかる。さらに、中国ペンの設立者およびロンドンにおける中国美術展開催に関係した中国美術研究者たちと、矢代がナショナリズムと離れた場所で交流していた環境も、確認されるのである

こうした矢代幸雄と中国美術研究者の、海外における交流は、中国のHui, GUO
（Leiden University）による博士論文『Writing Chinese art history in early twentieth-century

China』（二〇一〇年）など、近年における戦前期のロンドン他開催地での中国美術展研究の進捗とも呼応する、重要なテーマである。

矢代のロンドンでの存在感、ロンドンにおける一九三〇年代日中対外美術・文化政策と日本の対外美術・文化政策の関係、矢代の立場などは、国際ペンクラブ・ロンドン本部を重要な舞台のひとつとして、深く相関する事例である。

今後、さらなる裏付け調査を進めていくことがのぞましい。

三　一九二〇年代矢代幸雄資料

矢代幸雄は、西洋美術研究から出発した美術史家であり、近年はしばしば美術行政研究の側面から照射される存在である。が、小説家でも劇作家でも詩人でもない。エッセイは執筆しているが、そもそも、彼は日本ペン倶楽部の会員ではない*3。

矢代は、一九二〇年代のうちに国際ペンクラブ・ロンドン本部から晩餐会の招待を受けた件については、エッセイで言及している*4。

矢代のロンドン本部晩餐会招待について、HRC所蔵資料のうち、以下のフォルダーに、それぞれ関係するドキュメントが残されていた。

①MS. PEN. Letters. PEN. Yetts, W[alter] Perceval, 6TccL, 1ALS, 1nd, 1927-1931
②MS. PEN. Recip. Yetts, W[alter] Perceval, 1ALS, 2APCS, 1APC, 1ANS, 1927 October 5[postmark], 1927 October 14[postmark], 1927 October 19, 1931 April 3
③MS. PEN. Letters. PEN. To Yashiro Yukio, 1TccL, 1927 October 13

「MS」は原稿（manuscript）。上記資料のうち、「Letters.」フォルダーはペンクラブロンドン本部が郵送した文書の写しを収めたボックスであり、「Recip.」フォルダーは、本部が受け取った資料を収めたボックスを指す。

矢代幸雄の直筆資料は「Letters.」フォルダーはもちろん、「Recip.」フォルダーにも残っていなかった。

では、矢代招待については、どういう文書がロンドン本部との間で交信されていたのか。これらの文書では、受取も発信も、宛先はホテルやアパートなどではなく、「W. Perceval Yetts様方」となっている。上記フォルダー内ドキュメントによると、ロンドン本部はWalter Perceval Yettsを仲介して、一九二七年に矢代を晩餐会に招こうとした。しかし、一九二七年には矢代がロンドンにいなかったので晩餐会は沙汰やみとなり、Walter Perceval Yettsは、彼個人として矢代と交流を持ち続けると書き綴っている。

確かに、矢代は作家ではない。ただしHRC資料をみるかぎり、一九二〇年代後半の国際ペンクラブ主催の晩餐会では、招聘相手は、必ずしも作家や詩人やジャーナリストや劇作家ではない。外交官や大学教授であることも珍しくなかった。

また、戦前期日本ペン倶楽部メンバーにしても、そもそも、必ずしも作家や詩人である必要はなかった。山本亮介が考察したように*5、日本ペンの使命のひとつには翻訳による対外文化発信があった。そのため、創設時の日本ペン倶楽部は、創作活動には携わらない、数々の翻訳家を擁

していた。
矢代のケースは、翻訳者や作家として直接会員となることではなく、会員外の立場から、外交官のようにロンドンと直接交渉しているケースである。

四　MS. PEN. Recip. Yetts, W[alter] Perceval, 1ALS, 1926 February 24ほか

上記Walter Perceval Yettsだが、彼は一九二〇年代から、野口米次郎を国際ペン・ロンドン本部に紹介するなど、日本の文学者の英国への紹介に力を尽くしている。
Yetts, Walter Percevalは、他にもLaurence Binyonとともにアジア系知識人を招待しての晩餐会を計画している。彼が関心をもっていたのは、日本人だけではなかった。Hu Shihなどの中国人も、彼によって、同時期に国際ペンクラブ・ロンドン本部の晩餐会に招聘されているのが記録からわかる（Hu Shihについては現時点で未詳）。ここでは、文学や作家のことよりも、おもに中国美術について語る知識人や芸術家の会が想定されていたようである。
このように、日本人も中国人もWalter Perceval Yettsのもとでテーブルを囲んだ一九二〇年代ロンドンではあるが、中国人の場合、特にHu Shihは、その後、中国ペンクラブの一員になったようである。本稿で、稿者はHu Shihについて語るだけの準備を持たないが、HRC所蔵資料の中国ペンクラブ関係フォルダーでは、その後も、彼の名前を確認できる。
この晩餐会に矢代幸雄も出席していれば、彼や野口は、中国ペンのケースのように、日本ペン倶楽部の創設者のひとりとなったのだろうか。
これを理解するには、HRCのドキュメント群のうち、直接矢代幸雄が話題になっているドキュメントのフォルダーだけを見ていても、事情はわからない。
ただし、他の資料と照合していけば、意外な事実が確認できる。

国際ペンクラブ・ロンドン本部の場合、晩餐会招待は、ソーシャルクラブへの招待に近い性格を含んでいる。そのため、一九三〇年代のインドペンクラブ資料などをみると、作家でも詩人でもない上流階級のインド人が、晩餐会出席のみを希望して書簡を送ってきている事例を実見することができる。
この晩餐会への招待客は、事後のペンクラブ設立が容易になる。けれども、こうした晩餐会そのものに社交以外の合目的性がさほどない。
矢代の場合はどうだろうか。
ドキュメントを見る限り、まず、在ロンドン日本大使館の徳川大使が、国際ペンクラブ・ロンドン本部書記長のヘルマン・オールドに対し、「日本ペンクラブ設立については、こちらから日本に打診しましたが、本省から回答がありません」と書簡で返答しているのが、一九二五年二月二十四日である。つまり、一九二四年に創設された国際ペンクラブは、日本にも当初から設立を呼び掛けていたのだが、これを直接打診された日本大使館が、日本にペンクラブが設立されないと表明したのが、一九二五年なのである。
次に、先述のWalter Perceval Yettsのドキュメントをみてみよう。
国際ペンクラブ・ロンドン本部書記長のヘルマン・オールドが、「矢代幸雄はロンドンにいなかったので晩餐会に出席できない」というYetts, Walter Percevalに対し、「矢代幸雄に、日本ペンク

ラブ設立の問題にtackleしてもらいたい」という手紙を郵送したのが、一九二七年十月二十一日なのである（画像資料）。

つまり、一九二〇年代の国際ペンクラブ・ロンドン本部からしてみると、日本の外務省ルートでうまくいかなかった文化外交の窓口が、矢代幸雄なのである。

矢代は、潜在的には日本ペンクラブの創設会長と目されていたのであろう。

五　時期（1）

このように、一九二〇年代の矢代幸雄は、外交官に近いほどの文化外交の最前線にいた。しかし、彼が呼ばれたのはあくまでも「晩餐会」である。

公式な「会議」、昼間のビジネスライクな話し合いではない。

当初は大使館経由で外務省に報告がいったような、ロンドン本部から日本への文化外交的事項が、なぜ公式な会議ではなく、「晩餐会」で伝達されるような状況になったのだろうか。

これを理解するためには、以下の背景事情をふまえておくべきだろう。

国際ペンクラブ・ロンドン本部資料を閲覧した限りでいえば、一九三〇年までのペンクラブ全体には、ナショナリズム・政治性・主義主張が希薄である。このクラブにみなぎっているのは、晩餐会を中心とするソーシャルクラブ的性格なのだ。

一九二〇年代、ロンドンで芸術家が国際ペンクラブ・ロンドン本部の晩餐会に招聘されていた場合、上述の中国人のケースのように、確かにその晩餐会は、日本におけるペンクラブ設立打診を含んでいたのだろう。だからといって、一九二七年十月の矢代幸雄の招待は、必ずしも矢代とロンドンの文学者グループとの、ビジネスライクな会合（日本ペンクラブ創設打診・所属団体の代表同士の顔合わせ・資料打合せ・会議根回しその他）開催を意味しない。

文字通り、それは「社交」そのものである可能性が高いのである。

同資料に関係する書簡群から直接読み取れる内容も、どちらかというとペンクラブの外側の交友関係であり、Yetts, Walter PercevalおよびLaurence Binyonの、日本をはじめとするアジア人芸術家・美術史研究者への温かな対応、心配りである。

これまで我が国では、『日本ペン倶楽部三〇年史』*6（以下『三〇年史』）、『五〇年史』*7、芹沢光治良の小説『人間の運命』*8 に基づき、戦前期日本ペン倶楽部は一九三五年、国際社会で孤立する我が国を心配する、英国ほかの国際社会の慫慂をうけて創設され、一九四〇年までには官憲の圧迫によってほとんど活動ができなくなった、と考えられてきた。

つまりここでは、抽象的で倫理的な「国際社会」というものが、ロンドンから、日本を国際秩序に呼び戻すために声を発し、その結果として、日本はペンクラブを設立したというイメージが想定されている。

二〇一〇年になると、堀武昭『ペンは世界を変える』*9 が刊行される。さらに拙科研共同研究も開始し、上記の概念は変容する。共同研究の結果、実際には、国際ペンクラブ・ロンドン本部と個々の日本人の交流は、一九二〇年代からスタートしているうえ、ロンドン本部側の評価としては、日本国内で評価されている小説家などではなく、日本人外交官や矢代幸雄、また野口米次郎が特に注目されていたことがわかってきた*10。

ただし、一九二〇年代に限っていえば、日本大使館関係者や矢代、野口などがロンドン本部から求められていた交流の中身は、一九三〇年代から展開されるような近代的な対外文化政策上の「文化外交」ではなく、一九二〇年代的な、イギリス流ソーシャルクラブ文化圏内での「社交」である。

国際ペンクラブ・ロンドン本部での交流については、上記の日本人ドキュメント以外の資料を閲覧していっても、一九二〇年代には晩餐会中心の「社交」が根幹となっているとわかる。

その典型的な事例が、一九二三年のペンクラブ創設大会写真（画像資料2）であろう。ここでは、あくまでも華やかな貴顕淑女の会合がなされているのであり、現在のペンクラブで取り上げられる中心的な議題である亡命作家・獄中作家の話題は、むしろ回避されていたのではないだろうか。そういった事項は、上流階級のソーシャルクラブの話題としては、政治的にすぎるからである。一九三六年の「ペン・ニュース」（画像資料3）でも、一面トップを飾っているのは、日本ペン倶楽部やイタリアペンクラブの政治的傾向への憂慮などではなく、次回の会合が開催される豪華なレストランの紹介記事だ。

一九三六年であれば、すでに国際ペンクラブ・ロンドン本部では、ドイツペンクラブは本国にはなく、亡命ペンとなっており、イタリアペンクラブのマリネッティの言動が問題視され、新たに日本ペン倶楽部が設立されても、国際大会では日中関係についての説明を求められる。

そんな年であっても、当時のロンドン本部は現在のペンクラブとことなり、政治的な声明文の発表より、次回会合場所となるレストランの紹介を『ペン・ニュース』の一面にしていたのである。

また、レストランだけではなく、おそらくホテルおよびソーシャルクラブの建物などの「場」も、重要であったかと想像される*[11]。

近代のロンドンにおける芸術的結社、知識人グループといえばブルームズベリー・グループである。E.M.Forsterなどは、第二次大戦後も国際ペンクラブ・ロンドン本部の主要メンバーであり、Virginia Woolfはペンクラブ会員になるのを拒み通した記録が残っている（MS. PEN. Recip. Woolf, Virginia, TLS, 1935, October 25など）。

「一九二〇年代はブルームズベリーをつくり上げ、そして崩した。ブルームズベリーが意気高揚し、ものうげな火花を散らして輝き燃え、それからなおも赤く輝く燃えさしとなってゆっくり消えて行ったのは、二〇年代だったのである」（クウェンティン・ベル著、出淵敬子訳『ブルームズベリー・グループ』（みすず書房、一九七二）、九六～九七頁）といわれる。

芸術家や文化人、学者、美術研究家などの立ち混じるロンドン社交界の芸術的香気が、一九二〇年代にその最後のたかまりをみせたのは、国際ペンクラブ・ロンドン本部にしても、同様だったのではないだろうか。

六　時期（2）

次に、一九四〇年三月十三日の二通の書簡（一通はKBSの永井松三作成、もう一通は日本ペン倶楽部書記長の中島健蔵作成）とともにロンドンに送付された、日本ペン倶楽部・外務省・KBSの三者が連携し、矢代幸雄を関係者のひとりとして作成された英文冊子について考えたい。

これは、これまで複数回刊行された、公式な日本ペンクラブ史にはまったく言及のない、大規模な国際企画である。その企画の存在は、現時点では、HRC所蔵の本件資料でしか裏付けがとれない。

そのため、このパンフレットの示唆する企画が、あくまでも準備段階であって、後述する国際ペンクラブからの拒絶によって潰えたにすぎない萌芽的な存在だったのか、あるいは、KBSが日本ペン倶楽部とともに本格的に推進し、ある程度までは実現したものなのか等、具体的な説明はいまだに困難である。

このKBS主催の、皇紀二六〇〇年記念国際エッセイ募集英文パンフレットでは、審査員のひとりとして、矢代幸雄の名があがっているのだ。KBSと日本ペン書記長が、それぞれヘルマン・オールドに、一通ずつ協力打診文書を送付しているこの企画では、矢代幸雄以外の審査員は、国内では大家（土井光知や久松潜一ら）であっても、国際ペンクラブ・ロンドン本部にとっては、初見と思しき名前ばかりである。矢代だけは、ロンドン本部と直接面識があるとHRC所蔵資料からわかるが、他の審査員は本部関係者と面識があったとは考えにくいのである。

この皇紀二六〇〇年事業への協力打診に対し、国際ペンクラブ・ロンドン書記長のヘルマン・オールドは、「特定国の政策に組することはできない」と、拒否の返信を行っている（画像資料)。その後、日本ペンクラブは定期的な国内での会合はしているものの、欧州に対する皇紀二六〇〇年記念事業展開は止め、中国と共同で冊子を作成したと連絡している。ただし、当然、当時の中国ペン側の主張は、日本ペン側の主張と対立状態にある。

一九四〇年以降になると、日本の国際派文学者たちは、欧州、特にロンドン中心のペンクラブには目をむけなくなり、大東亜文学者会議開催に協賛している。そのためかどうか、日本ペン資料は一九四〇年以降、いったん姿を消す。そして一九四八年になるまで、国際ペンクラブ・ロンドン本部資料であるHRC所蔵資料では、様子をうかがい知ることができなくなるのだ。

少なくとも、日本ペンクラブは『三〇年史』などの説明とはことなり、官憲からの圧力によって対外発信ができなくなったわけではない。ロンドン本部への連絡は、一九四〇年にも確認される。しかも、この中島健蔵書記長時代の積極的な国際派・日本ペン倶楽部は、前述の通り官憲の圧迫どころか、KBS（および外務省）との連携をはかっているのである。

しかも一九四一年時点で、日本ペン倶楽部書記長としての中島健蔵は、わざわざロンドン本部ではないペンクラブにあて*[12]、「ともかくわれわれ日本ペンは存続している」と、やや皮肉な連絡をした記録が、「ペン・ニュース」に残っている。

『三〇年史』の主張では、この時期、日本ペン倶楽部は官憲の圧迫に堪えながらも、苦しい中でロンドン本部に対して、「(政治的に圧力をかけられているにもかかわらず、なお）われわれ日本ペンクラブは存続している」との電報を打ったことになっている。

が、これは『三〇年史』の記述の方があやまりなのである。

このような一九四〇年春以降の記録文書は、国際ペンクラブ・ロンドン本部資料コレクションを収蔵しているHRCには残っておらず、ロンドンの英国ペンクラブに保管されていた*[13]。

つまり、一九四〇年の日本からの対外文化政策協力打診に失敗してからは、日本ペンは、本部から除名などはされてはいないものの、ロンドン本部への連絡を、自分で絶やしてしまっていた、ということとなる。

七　一九三〇年代の（対外）日本美術史（政策）と（対外）中国美術史（政策）

話を矢代に戻そう。

矢代は戦後になってから、「対談　ヨーロッパの日本美術　矢代幸雄／バージル・グレイ」『朝日ジャーナル』（一九六七年一月八日号）ほかで、一九三五年から一九三六年のロンドンを席捲していた中国美術熱について、しばしば回想を記している。その内容は、主に
・ロンドンの日本贔屓は、日英同盟成立頃の一九一〇年代こそ盛り上がったものの、一九三六年や一九三七年は、ロンドンでは中国ブームだった。自分は当時のロンドンで、日本美術を語っても聴衆に受けないため、中国美術について語った
という趣旨である。

矢代幸雄の一九三〇年代のロンドンにおける中国美術史講義については、塚本麿充が、中国美術研究側の立場から論じて詳しい。塚本論文では、一九三五年と翌年の矢代による中国美術史講義は、はじめてアカデミックな中国美術史を構築したものとしている。

同じロンドン（ニューヨーク、また山中商会をアクターのひとつとした）における日中美術展の競い合いの現象について考察する朽木ゆり子『ハウス・オブ・ヤマナカ』*14 は、対外文化政策上の日本美術展と中国美術展、とくにニューヨークやロンドンにおけるそれを、二項対立的に解釈している。

しかし、実際に一九三〇年代に矢代が直面していたのは、日本人でありながら、日本美術と中国美術を同時に講じなければならない状況、特に、近代的な中国美術史をアジア人として最初に論じなければいけない状況である。さらに、日中美術史の両者を弁別し、日本文化の固有性を指摘するとともに、水墨画や陶器その他から、はじめてヨーロッパのアカデミズムのなかで、本格的に中国美術史という分野を、外国人のなかに立ち混じりつつ論じることであった。

しかもこの上に、ボッティチェルリ芸術に代表される西洋美術を、アジア人が論じて欧州に受け入れられるまでの、アジア人知識人としての前人未到の境地で、先陣を切り続けることだったのである。

つまり、美術史上の文化政策の覇権闘争は、矢代にとっては、二項対立的ではなく、きわめて複雑、多元的な現象であった。
『ハウス·オブ·ヤマナカ』などで見られるように、確かに一九三〇年代の日中間対外美術史政策は、相互に競い合う意味合いもあり、連合国側と枢軸国側で、両者のいずれを支持するかの覇権闘争があったのであろう。そして、それは連合国側に支持された中国の勝利のうちに幕を閉じる、という結果に到達する。

ところが、ニューヨークはともかく、ボストンおよびロンドンでは、日中いずれの陣営にとっても、矢代幸雄は日中英の三国間対外芸術政策闘争の、最前線にたつ人物であったのである。これは、他の分野の芸術文化政策には、まず見られない現象なのではないか。
これほど複雑な状況下では、矢代にはナイーブなナショナリズム支持、日本回帰、親中派の立場、アジア主義、欧州至上主義などの、いずれをとることも許されない。彼はオックスフォードで教壇にたった中国美術史家、同時に日本美術研究者であり、名著『ボッティチェルリ』著者であり、同時に一九三〇年代以降の日本の美術政策の重鎮なのだから。

これは日本美術／中国美術という、明確な境界線を引きにくい芸術、しかも欧米という、ことさらにアジア人が一元化されやすい場所で、それも一九二〇年代後半から四〇年という時期に、矢代クラスの大知識人が関与した場合の、特殊な事例である。

他の芸術政策、たとえば文学や映画における対外文化政策の枠組みでは、矢代の置かれたような状況は、めったに発生しない。そのため、このような状況に置かれた当時の矢代を総合的に理解するのは、今日のわれわれにとって容易ではない。

ただ、HRC所蔵の矢代幸雄関係資料は、当時の矢代や彼の背景を理解するのに、重要なヒントを与えてくれている。

一九二七年、Walter Perceval Yettsは、国際ペンクラブ・ロンドン本部資料のなかで、「矢代は晩餐会には来られなかったけれども、矢代とは今後も連絡をとり続けていく」という気持ちを表明している。この一九二〇年代の社交団体の連帯感は、その後も継続してゆく。

八　終わりに

一九二〇年代から一九三〇年代へ。この時代の流れは、ロンドンの伝統的なソーシャルクラブ文化圏内から次第に顕在化してくるプレ「文化政策」から、パンフレットや講演会ほか、近代的な手段を駆使し、自国の言語と文化の影響力増加を意識し、対外文化政策として自覚的に立案された草創期「文化政策」への、変化の流れなのではないか。

この変化は、一直線に進展する変化ではない。元来、ロンドンの社交クラブ文化圏内では、政治性は忌避される。

それにもかかわらず、一九二〇年代後半から四〇年までの国際ペンクラブ・ロンドン本部という特異な場においては、後述のように、「文化交流」と「社交」の概念再編成が、重層的・複雑に進展していったと考えられるのだ。

一九三〇年から一九四〇年にかけては、このいかにもイギリス風のソーシャルクラブ文化圏内にあった、国際ペンクラブをめぐる「外交」「社交」は、次第に近代的な「国策的対外文化政策」へと、再編成されていく。

これは重層的な再編成である。国際ペンクラブ・ロンドン本部においては、一九二〇年代のソーシャルクラブ的な連帯感を残したまま、一九三〇年代の近代的な欧州／日本／中国／インドの対外文化政策的動向が発生・発展してゆくのだ。

国際ペンクラブ・ロンドン本部においては、本来政治性のなかったソーシャルクラブに、一九三〇年代半ばより、国際的な作家たちのネットワークをいかした反戦・反帝国主義・反ナチズムなどの動きが混じってくる。

もともと政治を超越していたサロンであったはずのロンドン本部には、アンチ枢軸国側の文化人たちの亡命などの行動に関与する機会が増えてくる。

たとえばナチズムからの文化人の救済活動および亡命ペンクラブ設立に関しては、国際ペン書記長だったヘルマン・オールドが積極的な役割を果たしている*[15]。

一九五〇年代以降は、ペンクラブはむしろ、作家や詩人などが政治的な発言を積極的に行う場と認知されがちな状況となっている（社交と文化外交のバランス、本質的な共通性、近代的文化政策との類似・違和）。

矢代幸雄が、研究者、また美術行政官僚、教育者としていかに優れているかという側面について考察するだけでは、一九二〇年代から四〇年までのロンドンにおける文化外交の理解は十分ではな

い。ロンドンのソーシャルクラブ文化も終わりに近づいた一九二七年、イタリアの外交官やカルカッタ大学教授などとともに、文学者たちの晩餐会に招聘される矢代幸雄があってこそ、その後の対外文化政策における矢代の軌跡を、想像することを可能とするのである。

なぜなら、それこそが日本の芸術政策およびその研究に際して欠落しがちな、ロンドンの伝統をひいたエレガンスと社交の精神、ないし「Freemasonic friendship」（国際ペンクラブの標語）そのものだからである。

その後、矢代は一九四〇年、外務省主導の、戦前期日本ペン倶楽部の対外文化政策「（皇紀二六〇〇年記念エッセイ）」に巻き込まれていく。現代でも通用している、日本外務省・その外郭団体・民間団体の連携。これは、システマティックで日本的な対外文化政策であり、近代的な文化政策の機構としては完全である。

が、ここにはロンドンの伝統的ソーシャルクラブの香気、ないし「Freemasonic friendship」の齎す、魔術的な吸引力だけがない。

注

＊1　詳細は、拙稿「戦前期日本ペン倶楽部設立をめぐる国際情勢」『文化政策研究』（日本文化政策学会、二〇一〇年四月）参照。

＊2　26th Centennial International Essay Contest. Tokyo: KOKUSAI BUNKA SHINKOKAI, 1940.

＊3　会員名簿資料を含む、戦前期日本ペン倶楽部機関誌『会報』は、これまで創刊号が復刻刊行されているだけであった。日本ペン書記長であった中島健蔵の回顧でも、戦前の『会報』は三号で終刊したと書かれている。会員名簿を含む五冊は、加藤哲郎が島崎爽助氏の協力を受け、今回の共同研究で、新たに発見した。

＊4　管見の限りでは、矢代は、自身の関与していたKBSによる一九四〇年の皇紀二六〇〇年記念エッセイコンテストの件は、どこにも発表していない。

＊5　「'Kokoro（Le pauvre coeur des hommes）'（仏訳『こゝろ』）出版の周辺―国際文化交流における文学―」『日本近代文学』（二〇〇七年五月、第七六集）。

＊6　日本ペンクラブ、一九六七。

＊7　日本ペンクラブ、一九八七。

＊8　第二部第四巻「夫婦の絆」（新潮社、一九六六）、第二部第五巻「戦野に立つ」（新潮社、一九六七）

＊9　長崎出版、二〇一〇。

＊10　野口米次郎については、HRC資料では、
・MS. PEN. Letters. PEN. Yetts, W[alter] Perceval,1926　Febというフォルダーや、インドペンクラブ関係フォルダーに、彼に関係するドキュメントが残っている。野口とペンクラブについては、稿を改めて論じたい。

＊11　タタ財閥がインド人上流階級のためにグランド・ホテルを創設したケースや、宗内綾子「イギリス文学と「ホテル」1874 − 1939」『リーディング（Reading）』23（東京大学大学院英文学研究会、2002年）など参照。

＊12「日本ペン倶楽部は、存在だけはしている」という文書の欧州への発信については、『三〇年史』の説明では日本ペン倶楽部からロンドン本部に宛てたようになっているが、実際にはポーランドペンにあてた文書のようである。だが、現時点では本当にポーランドペン宛かどうか不祥。本件については、当時の日本ペン倶楽部書記長中島健蔵が、東京で会った在日ポーランド人作家アレクサンドル・ピスコールについて調べる必要がある。また本件は、連携研究者加藤哲郎による新発見事項であり、今年度の科研費報告書にも掲載する予定。

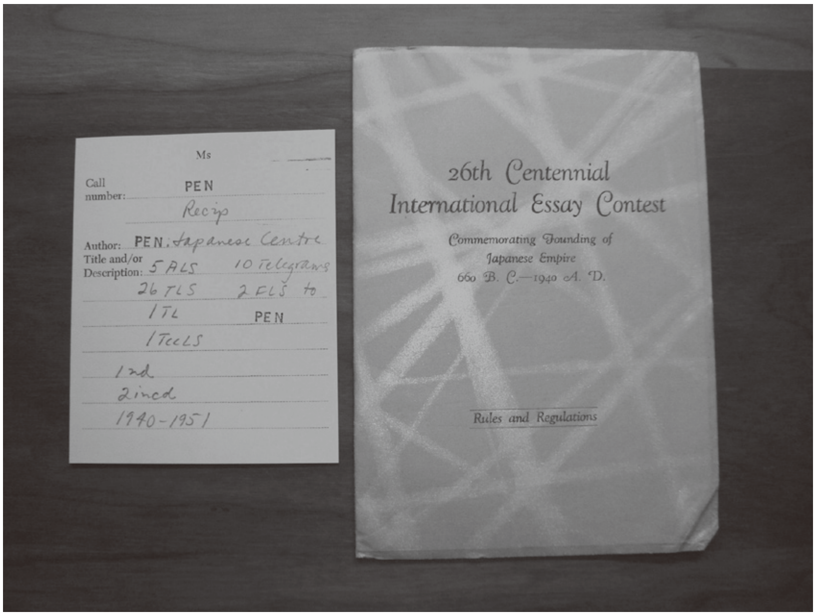
＊13　12に同じ。加藤哲郎の研究成果である。

＊14　新潮社、2011。

参考：
塚本麿充「滕固と矢代幸雄：ロンドン中国芸術国際展覧会（一九三五 - 三六）と中国芸術史学会（一九三七）の成立まで」『Lotus』（二〇〇七年三月、二七号）など
稲賀繁美「「日本の美学」: その陥穽と可能性と——触覚的造形の思想（史）的反省にむけて——」『思想』（第五号、№.一〇〇九、岩波書店、二〇〇八年）
Shigemi INAGA,Yasahiro Yukio（1890-1975）between the East and the West in Search of an Aesthetic Dialogue, International Research Center for Japanese Studies version 03, 2 July, 2011;04- 3 July 2011
Aesthetics in the World, First Polish-Japanese Meeting, Cracow, May 23-24, 2011
久保いくこ「矢代幸雄とアメリカ巡回日本古美術展覧会（一九五三年）」『近代画説』（十二号、二〇〇三年）
佐藤香里「GHQ の美術行政：CIE 美術記念物課による「美術の民主化」と矢代幸雄」『近代画説』（十二号、二〇〇三年）

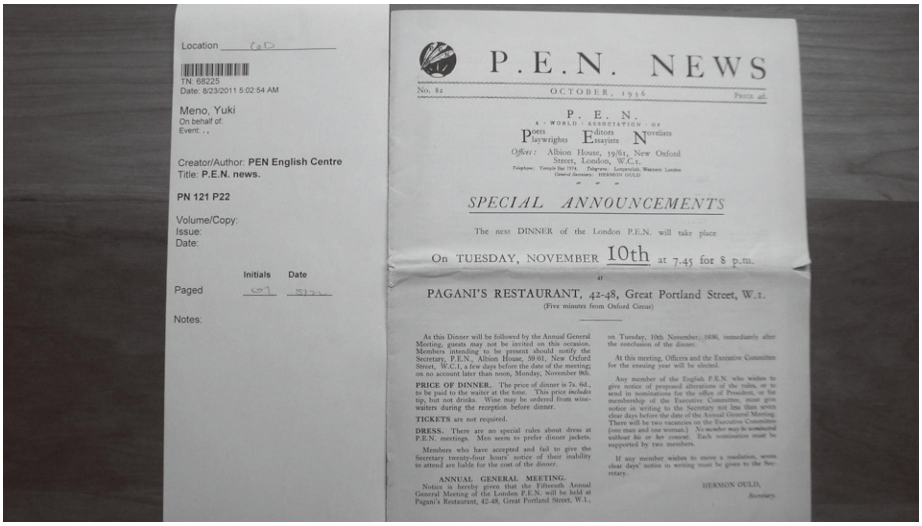
文中の敬称は省略した。引用に際し、原文のルビは省いた。本稿の作成にあたっては、「戦前期日本ペン倶楽部の研究—日印文化交流と国際文化政策」（科研費課題番号 22320043、基盤研究（B））の援助を受けた。本稿執筆の調査と論考にあたり、稲賀繁美先生、加藤哲郎先生、小中陽太郎氏、鈴木貞美先生、根本宮美子先生、畑中淳子先生、堀武昭氏、堀まどか氏、恵万江里氏・河内久実子をはじめとするテキサス大学院生ほかの研究協力者、Arthur Sakamoto 教授、テキサス大学オースティン校ハリー・ランソンセンターおよび同センター司書 Richard Workman ほか、多数の方々のご協力・ご指導を賜わることができた（記名は五十音順）。この場で深く感謝する。

資料1


Ms
Call number: PEN
Recip
Author: PEN: Japanese Centre
Title and/or Description: 5 ALS 10 Telegrams
26 TLS 2 FLS to
1 TL PEN
1940-1951
26th Centennial
International Essay Contest
Commemorating Founding of
Japanese Empire
660 B. C.—1940 A. D.
Rules and Regulations

資料2

資料3



Location

TN: 68225
Date: 8/23/2011 5:02:54 AM

Meno, Yuki
On behalf of:
Event: . ,

Creator/Author: PEN English Centre
Title: P.E.N. news.

PN 121 P22

Volume/Copy:
Issue:
Date:

Initials Date
Paged

Notes:

P.E.N. NEWS

No. 82 OCTOBER, 1936 PRICE 4d.

P. E. N.
A · WORLD · ASSOCIATION · OF
Poets Playwrights Editors Essayists Novelists
Offices: Albion House, 59/61, New Oxford Street, London, W.C.1.
Telephone: Temple Bar 7374. Telegrams: Lonpenclub, Westcent London
General Secretary: HERMON OULD

SPECIAL ANNOUNCEMENTS

The next DINNER of the London P.E.N. will take place

On TUESDAY, NOVEMBER 10th at 7.45 for 8 p.m.

at

PAGANI'S RESTAURANT, 42-48, Great Portland Street, W.1.
(Five minutes from Oxford Circus)

As this Dinner will be followed by the Annual General Meeting, guests may not be invited on this occasion. Members intending to be present should notify the Secretary, P.E.N., Albion House, 59/61, New Oxford Street, W.C.1, a few days before the date of the meeting; on no account later than noon, Monday, November 9th.

PRICE OF DINNER. The price of dinner is 7s. 6d., to be paid to the waiter at the time. This price *includes* tip, but not drinks. Wine may be ordered from wine-waiters during the reception before dinner.

TICKETS are not required.

DRESS. There are no special rules about dress at P.E.N. meetings. Men seem to prefer dinner jackets.

Members who have accepted and fail to give the Secretary twenty-four hours' notice of their inability to attend are liable for the cost of the dinner.

ANNUAL GENERAL MEETING.

Notice is hereby given that the Fifteenth Annual General Meeting of the London P.E.N. will be held at Pagani's Restaurant, 42-48, Great Portland Street, W.1., on Tuesday, 10th November, 1936, immediately after the conclusion of the dinner.

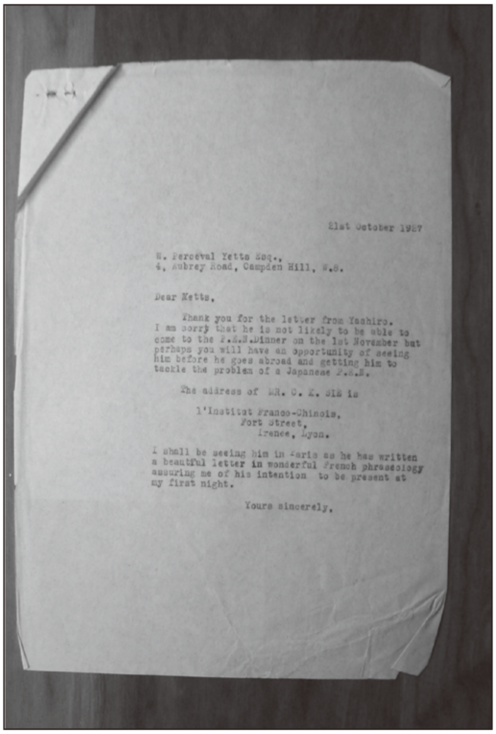
At this meeting, Officers and the Executive Committee for the ensuing year will be elected.

Any member of the English P.E.N. who wishes to give notice of proposed alterations of the rules, or to send in nominations for the office of President, or for membership of the Executive Committee, must give notice in writing to the Secretary not less than seven clear days before the date of the Annual General Meeting. There will be two vacancies on the Executive Committee (one man and one woman.) *No member may be nominated without his or her consent.* Each nomination must be supported by two members.

If any member wishes to move a resolution, seven clear days' notice in writing must be given to the Secretary.

HERMON OULD,
Secretary.

資料4



21st October 1927

W. Perceval Yetts Esq.,
4, Aubrey Road, Campden Hill, W.8.

Dear Yetts,

Thank you for the letter from Yashiro. I am sorry that he is not likely to be able to come to the P.E.N.Dinner on the 1st November but perhaps you will have an opportunity of seeing him before he goes abroad and getting him to tackle the problem of a Japanese P.E.N.

The address of MR. C. K. SIE is

l'Institut Franco-Chinois,
Fort Street,
Irenee, Lyon.

I shall be seeing him in Paris as he has written a beautful letter in wonderful French phraseology assuring me of his intention to be present at my first night.

Yours sincerely,